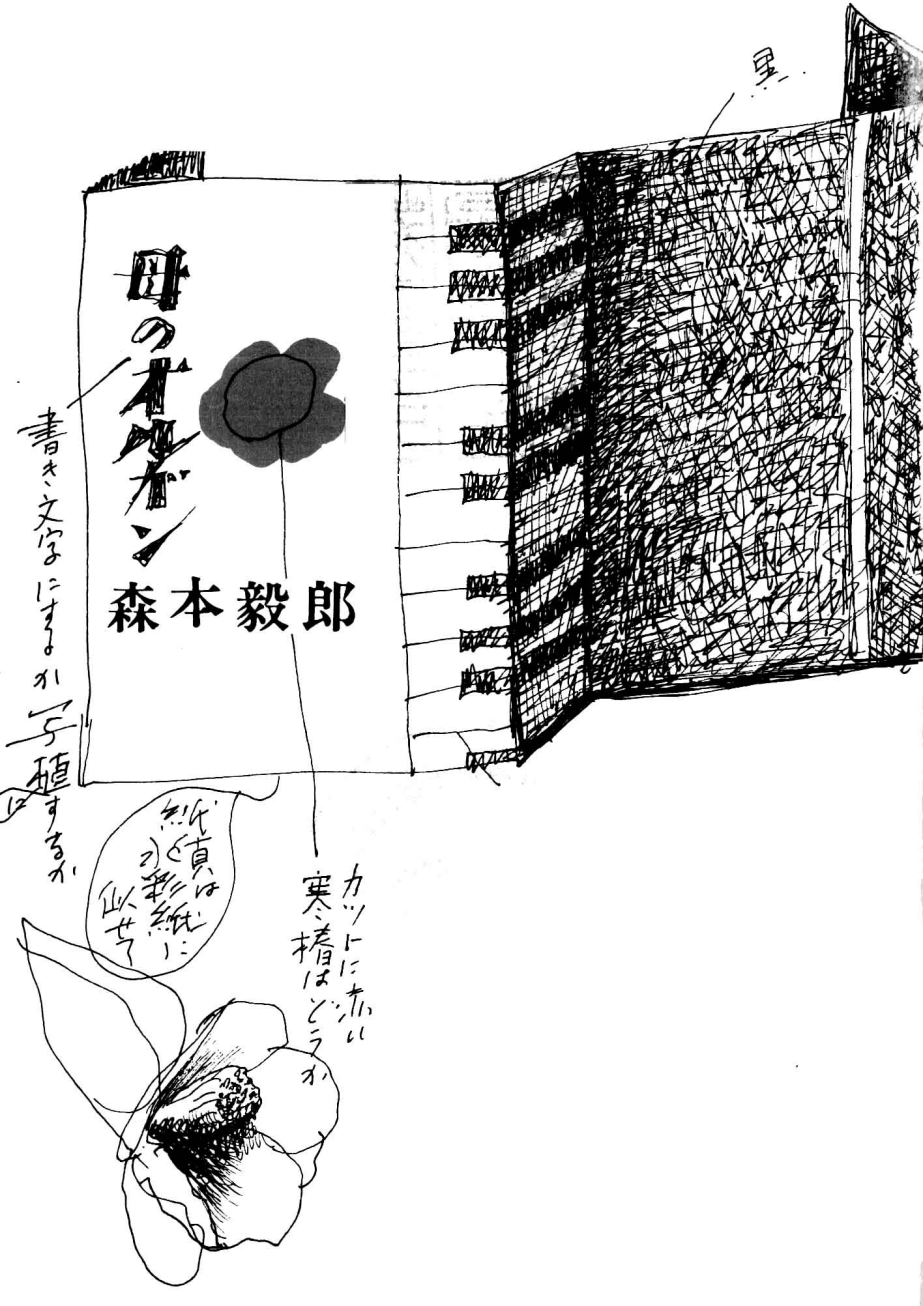
黒
月の木曜日
森本毅郎
書き文字にするか
5種するか
紙質は
水彩紙に
近せて
カッコにかいい
寒椿はどうか

母のオルガン

昭和六十年五月二十日　第一刷発行
昭和六十年八月二十二日　第三刷発行

著者——森本毅郎（もりもとたけろう）

© Takero Morimoto 1985, Printed in Japan

発行者——野間惟道
発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目一二—二一　郵便番号一一二　電話東京(九四五)一一一一(大代表)
印刷所——信毎書籍印刷株式会社　製本所——株式会社黒岩大光堂
定価——一〇〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN 4-06-201273-1(0)　(文1)

目次

こんぺい糖 7
やかん 17
オルガン 26
音楽学校 37
芙蓉 48
中野町雑色 62
血 77
扇子 94

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

百日紅　121
芋　135
日誌　150
筧の水　163
涙　177
夢の中　192
あとがき　206

裝幀　司　修

母のオルガン

こんぺい糖

この冬、私は北海道の北端稚内(わっかない)へ取材に行った。宗谷岬に立って、サガレンおろしと地元の人がよぶ寒風にさらされたとき、私は子供の頃味わった体の芯から凍るような寒さを久しぶりに思い出した。

昭和十九年十二月、東京がいよいよ戦火に見舞われるという予感から、私たち家族は長野に疎開した。初めて長野の地を踏んだあの日も、突きささるように風が冷たかった。

「眠っちゃだめよ、しっかり歩くんだよ」

もう真夜中近く、信越線の長野駅に降りて善光寺の方へ向って歩き出したとき、母はき

つい声で私にいった。真直ぐの広い通りの両側には旅館や土産もの屋が並んでいたが、みな戸を閉していてあたりに人影はなかった。

父も兄も三人の姉たちも闇の中を黙々と歩いていた。みんな大きなリュックサックを背負い、手に持てるだけの荷物を持っている。五歳の私も一貫目近いリュックを背負わされていて、そのひもが肩にくい込み、痛みで眠るどころではなかった。その上、頬もピリピリと痛い。風が吹いているとも思えないのに冷たい空気が顔にささるのである。私は歩調に合せて、「痛い、痛い」と心の中でくり返していた。

善光寺の裏にある横沢町という名を頼りに父は借家の所在を捜し回った。七年制高校尋常科の教師だった父は、長野の営林署の署長をしている教え子から横沢町に一家の疎開先を紹介してもらったのである。

「もっときちんと聞いておけばよかったんですよ」

と、母のとがった声が父の背にとんだが、父は黙って歩き続けた。

目の前に突然、善光寺の大きな本堂が黒く立ちふさがった。軒に下がった一メートル以上もあろうかという太いつららが異様な光を放っていた。

一時間近く歩き回って辿りついた横沢町の借家は魚屋の倉庫の二階だった。寝巻のまま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

鍵を渡しに出てきた魚屋の主人に父は何度もおじぎをした。私はそれまで父のそんな姿を見たことがなかった。小柄な父が一層小さく見えた。

もう売る魚も思うように手に入らなくなっていたのだろう、一階の倉庫はがらんとしていた。急な階段を上ると、高窓が一つあるだけの二階は二間に仕切られていて、床にはうす汚れた莫蓙が敷いてある。リュックに詰めて来た台所用品や最小限の食器などをその上に並べながら母は、

「これで空襲のない生活が出来る。やっと夜も眠れるねえ」

としみじみいった。

すでに届いていた蒲団を部屋中に敷きつめて、私たち七人は床に入った。階下から吹き上ってくる風で蒲団の中はいつまでも温まらず、明け方近くねずみが枕元を走り回る音を私は闇の中で身を固くしながら聞いていた。

やがて父は東京に戻り、しばらくして長姉と次兄も父の元へ帰っていった。次兄はどうしても長野の生活になじまず、毎日火鉢の前で憂うつそうな顔をして坐り込んでいたので、長姉が東京へ連れて帰ったのである。自然母は長野と東京の間を往復するようになっ

た。まだ薄暗い朝、私が目を覚すと、もんぺ姿に身支度をすませた母が枕元で身をかがめて、

「東京へ行ってくるからね、おとなしく待っているのよ」

とささやき、リュックを背負って階段をおりて行くのだった。

今でも母は、

「あの頃お前はほんとに手がかからなかったよ」

というのだが、私にしてみれば、私を残したまま毅然として東京へ向う母の姿に圧倒され、駄々をこねることなど出来なかったような気がする。

すぐ上の姉の尚(なお)ちゃん、その上の姉の絢(あや)ちゃん、それに私の三人が留守番だった。当時絢ちゃんは十七歳、すでに女学校を卒業していたので、署長の厚意で営林署へ働きに出ることになった。すぐ上といっても七つも年上の尚ちゃんは地元の女学校へ通いはじめていた。私はまだ小学校に入る前だったから、昼間一人家に残される。近所に友達も出来ず家にこもりがちで窓から外の景色をぼんやりと眺めていることが多かった。びっしりと軒を寄せ合った家々の屋根のむこうに小さな橋があり、その先は小高い丘が続いている。私の記憶では、窓から見る風景はいつも色彩に乏しく、屋根も丘も雪に白く覆われていた。

倉庫は表通りから路地を少し入った奥にあり、家主の魚屋の敷地のすみに立っていた。戸口の前には私たちが使う古いかまどが一つあり、その先は魚屋の中庭で、小さな植え込みがあった。雪をかぶった梅やつつじの植木ごしに魚屋の二間続きの座敷が見える。縁側の前の障子は閉っていて部屋の中の様子はわからない。

「魚屋にはお婆さんが二人もいるそうよ。貞さんとお辰さん」

「お辰さんて、丸顔の太った人でしょう。よく顔を見るけど六十位かな」

「貞さんはもう寝たきりらしいわ、八十すぎで口もよくきけないって」

「お辰さんが貞さんの世話を全部しているんだってね。とても元気なのよね」

そんなうわさを姉たちがしているのを耳にして、私は貞さんがあの障子の陰にいるにちがいない、どんなお婆さんだろうと思っていた。もんぺをはいたお辰さんが、部屋の前の縁側を拭いたり、盆をもって部屋に入っていったりするのを私も見かけていたが、貞さんの姿はついぞ見ることがなかった。部屋の障子は大抵閉っていたが、午後になってにぶい日差しが障子に当るほんの少しの間半分だけ開いていることがあった。そんな時も外からのぞいてはいけないような奇妙な雰囲気があった。

しかしある日障子が半分開いているのに気付くと、私は引き寄せられるように中庭を横

切り、縁側から思い切って中をのぞき込んだ。部屋の中には蒲団が敷いてあり、その上に一人の老婆が坐っていた。想像していたより大柄な老婆は白髪をざん切りにし、どす黒い顔にはたてにも横にも太いしわが刻まれている。小きざみに動く首を私の方へ向け、その細い目が私と出会うと彼女はにっと笑った。私は思わず、あっと小さな叫び声をあげた。口をあけて笑った彼女には歯が一本もなかったのである。立ちすくんでいる私に向って彼女はゆっくりと手招きした。その途端、寝巻の上にかけていた紺がすりの綿入れが肩からずり落ちた。私は後も見ずに倉庫の二階へ逃げ帰った。東京にいた頃絵本で見た妖怪に出会ってしまったと私は息をはずませながら思った。

それでも、私は昼間一人になると貞さんの部屋に近づいていった。いつの間にか縁側に腰かけて過すようになり、閉っている障子の外から私が声をかけると貞さんが畳の上を這うようにして障子を半分開けてくれるようになった。彼女も私を待っているようだった。貞さんは口がよく利けなかったから、二人は格別話をするということもなかったが、半開きの障子をはさんで貞さんと一緒にいるのが何故か私には心地よかった。縁側の陽だまりの中で、長野に来て初めて安心して過せる場所を見つけたように私には思えた。

我が家にはいつも米がなかった。母が東京に行ってしまうと、私たち姉弟では米を手に入れる方法も見当らず、営林署の署長が絢ちゃんに持たせてくれる米が唯一の頼りだった。しかしそれも二、三日でなくなってしまう。そんな時、私たち姉弟は夕方になると中庭のかまどの使いように困り途方にくれた。魚屋からは夕飯の支度をするマナ板の音や、魚を焼くにおいが伝わって来る。

「絢ちゃん、どうしよう。かまど使わないとお米がないことわかってしまうもの」

と尚ちゃんはおろおろした。人の目が一番気になる年頃なのだ。

「みっともないから、御飯を炊くふりだけでもしようよ」

「じゃお湯を沸かそう。釜のふたをしておけばわかりゃしないから」

絢ちゃんはそういって急に立ち上り、釜に水を入れると階段をおりて中庭のかまどにかけた。尚ちゃんは黙って薪をくべた。

「タケ、お釜を見ててね」

というと二人は二階に上っていった。部屋にある小さなコンロで大豆を炊くのである。これが私たちの本当の夕食だった。私はしばらくかまどの火を見つめていた。すると貞さんの縁側から私をよぶ声が聞こえ、お辰さんが手招きした。

私が縁側に近づいていくとお辰さんは一握りのこんぺい糖を私の掌にのせて、
「お手伝いえらいねえ」
といってそばにしゃがみ込んだ。お辰さんはしばらく私に話しかけていたが、ふっとかまどの方を見て、
「あれ大変だ、御飯がふいている」
というやいなや、縁側から下駄をはいて走り出し、
「絢子さん、御飯がふいていますよ」
と倉庫の二階に向って大きな声で叫んだ。私がかけ出し、絢ちゃんが二階から走り下りて来るのと、お辰さんが釜のふたをあけたのとはほとんど同時だった。お辰さんは釜の中をじっと見つめ、ゆっくりと目を絢ちゃんの方に向けると、おどろくほど静かな声で、
「すみませんでした。余計なことしてしまって」
とあやまった。絢ちゃんはあいまいな笑顔をお辰さんに向けたが、私の手を強い力で掴むと二階に私を引っぱって行った。そして部屋に入るなり私の頬をピシリと張った。
「もういや、私、こんなのいや」
といって尚ちゃんは泣き出した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com